

万能細胞とは、iPS細胞 (induced pluripotent stem cell) のことで、人工的に作られた多能性幹細胞のことである。皮膚の細胞に4つの遺伝子を導入すると細胞が変化し、どんな臓器の細胞にも変化できる「万能な」細胞になることを京都大学のグループが発見した。この成果は、受精卵を使わなくてもES細胞と同等の細胞が得られることを意味し、再生医学の見地から非常に注目されている。

以前までは、皮膚の細胞は皮膚の細胞のまま、それが他の臓器の細胞に変化することはないと信じられてきた。神経細胞はどこまでいっても神経細胞であり、腸の細胞はやはりどこまでも腸の細胞だと考えられてきた。

しかし京都大学のグループが示したように、条件さえ整えてやれば皮膚の細胞でも神経細胞や腸の細胞になりうるのである。つまり一つの細胞が持つ「可能性」は「無限」と言ってもよいであろう。

一個の細胞が無限の可能性を持つのであれば、

万能細胞に思う

山本典生

その細胞の集合体である私たち自身も無限の可能性を持つだろうと考えたら、突飛に思われるだろうか。細胞と個体の関係は、個人と社会の関係に似ていると私は思う。一個の細胞は無限の可能性を持ち、その中から一つの姿を選んで個体の中で役割を果たしている。

これを個人と社会について当てはめると、無限の可能性を持つ個人が、無数の選択肢の中から一つの姿を選んで社会の中での役割を果たしていると捉えることもできる。

私たちは現在の姿ばかりに目が行くあまり、本来自身が持っている無限の可能性を忘れてしまいがちである。しかし、激動の時代である今こそ、自分の内にある無限の可能性を自覚し、現実の壁に挑んでいくことが大事ではないだろうか。自身の無限の可能性を引き出しながら、日々前進していきたいものである。

(やまもと のりお／東洋哲学研究所委嘱研究員)